

地方ミッション系女子大学卒業生の 社会関係資本と幸福感 —宮城学院卒業生のジェンダー意識・友人関係に 着目して—

天 童 睦 子・石 川 由 香 里

はじめに

本稿は、地方のミッション系女子大学卒業生の社会関係資本と幸福感の諸相を、ジェンダーの社会的視点から実証的調査をもとに考察する。本稿で用いるのは、宮城学院女子大学および宮城学院女子短期大学（以下宮城学院と総称）の卒業生を対象に行った質問紙調査のデータである。

本研究は、「女子ミッション教育史研究会」による共同研究の一環であり、戦後の宮城学院卒業生のうち、40歳代から60歳代のコーホートを対象として大規模な質問紙調査を実施した（2021年実施 対象数3297名）。卒業生の40歳代以上を対象とすることで、卒業後のライフコースの変遷、時を経て振り返る学生生活や大学での学び、また現在のジェンダー意識や育児観、幸福感の諸相を読みとくことができると考えた。とくに学生時代に熱心に取り組んだこと、学生生活の満足度といった大学生活の自己評価、ジェンダー意識、幸福感、社会的ネットワーク、入職・職業の継続パターンなどを明らかにすることを目的とした。なお、職業キャリア（初職への入職・職業の継続パターン）についてはすでに別稿で論じている（片瀬・天童 2022）。

本稿の構成について、1で本研究の枠組みとなる「社会関係資本」とはな

にかを論じる。2で質問紙調査の位置づけを説明し、3で宮城学院卒業生の社会関係資本と幸福感のかかわり、ジェンダー意識、育児観などの調査データを提示する。4でデータ分析をふまえた考察を行い、最後に、地方のキリスト教主義女子大学出身者の文化資本、社会関係資本の特徴を考察し、現代における女性のウェルビーイング（well-being）の課題に論及する。

1. 社会関係資本とはなにか—研究の視点

社会関係資本の登場

社会関係資本は social capital の和訳で、人々の間にある信頼、ネットワーク、互酬性の規範といった意味で用いられている。本稿では主に社会学に依拠した論述を整理するが、ソーシャル・キャピタルの概念や理論、実証的研究はさまざまな分野で注目され、政策にも取り入れられてきた。

古くは教育学者ジョン・デューイの『学校と社会』（増補版）において、ソーシャル・キャピタルという語彙は「社会的資本という富の扉」を子どもに開く鍵との文脈で用いられた（デューイ 1915／市村尚久訳：178）。近年ではソーシャル・キャピタルを健康やウェルビーイング、国家政策に生かそうとする試み（Halpern 2005 など）、災害の際に生起するソーシャル・キャピタルに着目した研究（Aldrich 2012）もある。稲葉は、東日本大震災の際、その惨事においてなお、人々が譲り合う互酬性や絆に「ソーシャル・キャピタル」を見出している（稲葉 2011）。

本稿では社会学領域の代表的論者として、まずブルデュー（P. Bourdieu）を取り上げる。さらにコールマン（J. Coleman）、パットナム（R. Putnam）、またリン（N. Lin）のソーシャル・キャピタル論に言及する。

文化資本と社会関係資本

ブルデューのソーシャル・キャピタル概念を再考するうえで、彼の「資本」

(capital) のとらえ方を見ておくべきだろう。よく知られた文化的再生産論で示された「文化資本」(cultural capital) は、文化的なもの、象徴的なものが、一種の「財」あるいは「資産」となり、それが世代を超えて伝達される「資本」の役割を果たすことを示した。そして、文化資本の3つの様態として、身体化された文化資本(なにげないふるまいや言葉遣い)、客体化された文化資本(絵画や本、道具といった文化的な物)、制度化された文化資本(学歴・資格)を挙げている(Bourdieu 1979)。

ブルデューは階級関係の再生産に、文化的要素や教育の営みが深く関与していることを見て取った。文化資本の獲得・蓄積・継承には経済資本の保持が前提となり、さらに文化資本はやがて経済資本に転換される(天童編 2008: 30-32)。

一方、社会関係資本について、ブルデューは文化資本とは切り分けた定義を与えている。簡潔に言えば、社会関係資本とはネットワークを指し、相互に認識された制度化された関係性の持続的ネットワークの保持によってもたらされた、実際のあるいは潜在的資源の集積(aggregate of the actual or potential resources)をいう(Bourdieu 1986: 248-9)。つまり、ブルデューのいう社会関係資本は、集团的信頼関係のメンバーシップ(成員性)に裏打ちされ、物質的／象徴的交換が可能なものであり、投資の戦略に用いられる「資本」なのである。

文化資本、また社会関係資本の概念において、資源(resource)ではなく「資本」とあるのは、文化的なものであれ、社会関係的なものであれ、蓄積・維持に時間を要するものであり、さらには世代を超えた再生産の過程で、不均衡な社会関係を内包した、権力関係の視座を含むものとなる点をおさえておきたい(Shimbo & Tendo 2022)。

社会関係資本の定義とジェンダー視点

社会関係資本の定義は、研究者によってさまざまになされてきたが、社会学の代表的なものとして、前述のブルデューに加えて、コールマン、パットナムが挙げられる（Bartkus & Davis 2009; Field 2017）。

コールマン（1994）は、ソーシャル・キャピタルはその機能によって定義されると述べ、単一の実体というよりも、さまざまに異なる実体が合わさったもので、社会構造のいくつかの要素から構成され、その構造の中にある個人（individuals）の行為を円滑にするものという（Bartkus & Davis 2009: 3）。

パットナムの2000年のベストセラー『孤独なボウリング』はソーシャル・キャピタル概念を広めるものとなった。「社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」であり、孤立した人々の作る社会は、社会関係資本において豊かではないと指摘する。パットナムはネットワーク、規範、社会的信頼といった社会的に組織されたものが相互の利益となるようなかわりに注目した（Putnam 1993, 2000）。

これら既存のソーシャル・キャピタル論に対して、フェミニズム批評はジェンダーの視点を欠いている（gender blind）点を批判してきた。ソーシャル・キャピタル論やその実証的研究で論じられる市民相互のかわりやネットワーク自体が、高度にジェンダー化されているにも関わらず、それに目を向けてこなかったためである（Field 2017: 24）。もっとも、既存の代表的研究が女性の役割をまったく取り上げてこなかったわけではない。たとえば、パットナムは、コミュニティや所属集団でのソーシャル・キャピタルの生産に女性が多くたずさわり、「社会関係資本の創造と維持にとりわけ重要な役割」を担ってきたとし、「女性の方が男性よりも熱心な社会関係資本家」（記書 2006: 109）という。しかし、そこでは集団内、家族内のジェンダー関

係に存在するジェンダー化された権力関係は見過ごされてきた (O'Neill & Gidengil 2006)。

ジェンダー視点でソーシャル・キャピタル論に切り込んだ著作 *Gender and Social Capital* (O'Neill & Gidengil 2006) では、これまで無視され、軽視されてきたジェンダー分析を取り入れ、社会関係資本の配分やアクセスの検討を通して、ジェンダーと不平等に焦点を当てること、またその理論が「ジェンダーと政治」の展開にいかにかに用いられるかを検討しようとしている。既存の理論のジェンダー不在を指摘するにとどまらず、ソーシャル・キャピタル論をいかに応用し、ジェンダー平等な社会の構築に生かすか、理論的・実証的研究は日本の家族と教育研究などでも取り組まれている (石川ほか 2018)。本研究はその展開上に位置付けられる。

社会的ネットワークの特徴：橋渡し型と結束型

これまで見てきたように、ブルデューのいう社会関係資本は、文化資本と同様に、階級関係や権力関係と結びつき、個人にとっての「資本」となる点を強調する (Bourdieu 1986)。わかりやすく言えば、社会関係資本は人脈(いわゆるコネ) のことであり、その保有の度合いにより、進学や就職の差が生まれかねない事例を考慮すれば、ブルデューはネットワークの隠れた不平等やその偏在に目を向けたといえよう。

一方、ソーシャル・キャピタルの理論化に取り組んだナン・リンは、ソーシャル・キャピタルを、社会的ネットワークに埋め込まれた資源ととらえた。リンは「日本語版への序文」で、ソーシャル・キャピタルが「社会的ネットワークの中から捕まえられた資本 (資源)」であり、「社会的ネットワークは社会関係資本の大事な外生的条件」であるという (リン 訳書 2008: v 頁)。またリンは、社会的ネットワークの様々な特徴、たとえば紐帯の強弱や、紐帯がブリッジング型 (橋渡し型) であるか、ボンディング型 (結束型) であ

るかといったことは、そのネットワークから望ましい資源が得られるかどうかを決める重要な条件であるという。本稿では、ひとまずリンの説明をふまえて、社会関係資本を社会的ネットワークに埋め込まれた資源ととらえておく。

社会的ネットワークの説明における紐帯の2つの型として挙げられるブリッジングとボンディングとは何か。ジェンダー視点から社会的ネットワークを取り上げ、個人・集団・社会への影響を考察した研究では、ブリッジング・ネットワーク（橋渡し型）は、社会的・イデオロギー的に包摂性を特徴として、個人、グループをつなぐ機能、すなわち異なる社会的位置や考え方の個人や集団を橋渡しする、ポジティブな機能を持つと説明する。他方、ボンディング・ネットワーク（結束型）は、内側の凝縮性を特徴とするため、社会的には閉鎖性が強まる場合がある。そのため、個人、グループにはポジティブ・ネガティブな両義性をもつ。

ジェンダー視点からノリスら（2006）は、ブリッジング・ネットワーク（橋渡し型）が、異なる立場や地域をつなぐという意味で、たとえば「赤十字」の活動を例に、社会関係資本を構築して社会の利益と平等をもたらすポジティブな機能をもつと述べる。他方、ボンディング・ネットワーク（結束型）は、同じ属性、共通の価値を特徴として、血縁・地縁関係の密なつながり、同窓会の絆といった例でみられるもので、ポジティブな相互支援的機能をもつが、他方では、排他的な血族関係・地縁のしがらみ、さらに差別的価値を強調するネガティブな閉鎖的結束の集団（ノリスらは Ku Klux Klan などの例を挙げている）ともなりかねない面をもつ（Norris & Inglehart 2006）。現実の社会的ネットワークは、ブリッジングとボンディングの特徴と機能を併せ持っている。

さらに、社会関係資本が個人財であるのか集合財であるのかについては、論者によって主張の分かれるところである。例えばコールマン（1988）は、

子どもの学業達成に関わる社会関係資本として家族を捉え、とくに母親の子どもへの関与を重要視した。あるいは転職において弱い紐帯に着目したグラノヴェター（1973）もまた、個人財として社会関係資本を捉えていたと言える。社会関係資本のもたらす個人的効用としては、求職活動、育児や介護の際のサポートなどが検討されることが多いが、そこには道具的側面だけでなく、情緒的側面も存在する。その情緒的側面の指標の1つが幸福感であると言える。

2. 調査の位置づけと課題

本質問紙調査の分析に入ろう。調査主体の「女子ミッション教育史研究会」（代表 片瀬一男・東北学院大学）は、東北のミッション系女子教育の歴史と現在を研究対象とする研究者グループで、宮城学院女子大学の歴史社会学的研究、および卒業生意識の社会学的分析に関心を寄せてきた。

本調査票調査に先立ち、片瀬は、宮城学院の創立記念誌『期にいたりて実を結び』に掲載された同窓生による寄稿文の内容分析（テキストマイニング）を行った。ここでは、卒業生の寄稿文の内容を対応分析によって位置づけ、西欧的・キリスト教的文化と日本的・家族的文化の軸と、専門職的なライフスタイルの軸を掛け合わせて、3つのコーホート（信仰、女性性、キャリア・国際志向）を見出している（片瀬 2019）。また研究グループでは並行して、地元宮城や全国各地で活躍する、同窓生のインタビュー調査を行い、その知見の一部は「同窓生の個人史」的研究（片瀬・相澤・遠藤 2019）などにまとめられている。ただし、これらの分析では、同窓会から創立記念誌に寄稿依頼を受けた卒業生、ないしは「特筆すべき同窓生」のライフコース事例が主に取り上げられ、それが同窓生全体の意識を検討したものとはなっていない。

そこで、本研究では宮城学院女子大学および宮城学院女子短期大学の卒業

生の、より一般的実像に迫るべく、同窓会名簿からの標本抽出によって特定の層に偏らない質問紙調査を、3つのコーホートに焦点化して行うことにした。なお、このコーホートは年代区分であり、前述の志向性3分類とは異なるものである。

調査方法と3つのコーホート

本質問紙調査の対象は、卒業生のうち、40歳代、50歳代、60歳代の卒業生のほぼ中央の2学年（表1参照）を、各世代を代表するコーホートとみなし、いずれの学年も、同窓会名簿で住所が把握されている全数を対象とした（総計3297名）。

調査方法については、宮城学院同窓会（宮城県仙台市）の全面的協力により、郵送調査による質問紙調査を実施した。具体的には対象となる卒業生3297名に郵送調査（対象者に調査票を郵送し、返信用封筒にて回収する郵送調査法）を実施し、調査期間は2021年7月-8月で、有効回収数は1148（回収率34.8%）となった。この数は他の一般的な社会調査の郵送調査に比べても良好な数といえる。

なお、過去にも津田塾大学やお茶の水女子大学など、女子大学の卒業生対象のライフコース調査がなされたことはあるが、このような規模の社会的

表1 宮城学院同窓生調査 標本構成

コーホート・年齢 (2021年調査時)	第1コーホート 65-66歳	第2コーホート 55-56歳	第3コーホート 45-46歳
大学卒業年度	1977 1978	1987 1988	1997 1998
短大卒業年度	1975 1976	1985 1986	1995 1996
就職時期の時代背景	オイルショック 高度経済成長の終焉	経済活況 バブル期	バブル経済崩壊後 の就職氷河期

60代、50代、40代のほぼ中央の卒業年次から2学年

調査は少なく（片瀬・天童 2022）、また本調査は、地方のキリスト教主義学校を卒業後、人生を重ねた女性の意識調査を行った点に独自性がある¹。

本稿で注目する設問は、大学生活の振り返り、具体的には「学生時代に熱心にとりくんだこと」や「学生生活の満足度」、卒業後の進路、ジェンダー意識、育児観、文化活動、社会的ネットワーク、幸福感などである。それらの分析を通して、地方の女子大学出身者のライフコースの一端を明らかにすることを企図した。本稿ではとくに、女性の社会関係資本と幸福感のかかわり、ジェンダー意識、育児観に注目して、卒業生に見る社会関係資本の特徴を検討したい。

まず、3つのコーホートについて説明しよう。ここでいうコーホートとは、同時期に同一の経験を共有した年齢集団のことである。

第1コーホート（調査時 64-66 歳）は、卒業年度が 1977～78 年度（短大 75～76 年度）で、就職の時期は 1971 年のドルショック、73 年の第一次オイルショック、76 年の第二次オイルシクを経て、日本の高度経済成長が終焉を迎えた時期である。第2コーホート（調査時 54-56 歳）の卒業年度は 1987 年～88 年度（短大 85 年～86 年度）で、経済的活況の時期にあった、いわゆるバブル期に当たる。そして最も若い第3コーホート（調査時 44-46 歳）は、1997 年～98 年度（短大 95 年～96 年度）の卒業で、1990 年度初頭のバブル経済崩壊後の就職氷河期に就職活動をした層である。

本質問紙調査の概要と卒業生の初期ライフコースについては、片瀬・天童（2022）で、それぞれの時代背景をもとに大学生活の評価と初職の達成および継続という初期キャリアについて検討を行った。本稿はその続編である。

なお、本稿で分析に用いるその他の主な質問項目についての記述統計量は以下の通りである。

表 2 記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
コーホート	1	3	1.850	0.802
夫あり	0	1	0.925	0.263
子どもの有無	0	1	0.897	0.304
現在の幸福度	1	4	3.470	0.575
学生生活満足度	1	5	4.145	0.835
幅広い教養	1	4	2.781	0.733
学問分野に関する知識	1	4	3.017	0.778
資格を取得	1	4	2.752	1.027
キリスト教学で人格教育	1	4	2.140	0.782
幅広い交友関係	1	4	2.962	0.765
近所の人	1	5	3.413	1.030
職場の人	1	5	3.497	1.252
夫の友人	1	5	2.431	1.080
子どもの友人の親	1	5	3.312	1.245
ボランティア活動の友人	1	5	2.418	1.333
趣味・習い事の友人	1	5	3.131	1.385
宮城学院の友人数	0	50	3.154	3.429
宮城学院趣味の友人数	0	20	0.665	1.807
大学友人	0	1	0.801	0.400

3. 宮城学院卒業生の幸福感－調査データの分析

3-1 生活の満足度：内閣府のウェルビーイング調査

「幸福」の捉え方

幸福の捉え方はさまざまであるが、「社会関係資本と幸福感」の関連はしばしば指摘されてきた。とくに近年では人々の生活の質や満足度が国の政策上の課題となっている。

幸福度の国際比較については、世界幸福度レポート（World Happiness Report）がある。世界幸福度レポートは、国際連合の持続可能開発ソリューションネットワークが発行するもので、この調査における幸福度とは、自分の幸福度が0から10のどの段階にあるかを答える世論調査によって得られた数値の平均値であり、主観的な値である。

同報告書は、1人あたりGDP、社会的支援、健康寿命、人生の選択の自由度、寛容さ、腐敗の少なさという六つの変数で順位付けされており、国別の幸福度ランキングで1位はフィンランド（6年連続）、上位は欧州の国が多く、日本の順位は137カ国中47位であった（2023年）²。

日本に目を向けると、内閣府「満足度・生活の質に関する調査報告書 2023—我が国の Well-being の動向」では、新型コロナウイルス感染症の拡大がもたらした行動変容や、その後の社会活動の変化が「満足度」へ与えた影響について取り上げている。幸福感（幸せと感ずるか）と生活の「満足度」は同一ではないが、この内閣府調査では、人々の生活の満足度が交友関係やコミュニティのつながり、すなわち社会的ネットワークと関連づけられて考察されている。また、2021年の調査を振り返り、この年に、生活満足度がとくに女性で、また非正規雇用で落ち込んだことが指摘されている（内閣府）³。

内閣府調査（2023年）の結果を要約すると、生活満足度の分野別満足度（重回帰分析）で最も説明力が高いのは、「生活の楽しさ・面白さ」であり、次いで、「家計と資産」「仕事と生活」「健康状態」となる。これらの関係性は、一部において男女で差があり、「教育水準・教育環境」、「交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」については、男性で有意に正の係数が認められる。女性では有意ではない。また、「政治・行政・裁判所への信頼性」については、女性で有意に正の係数が認められるが、男性では有意ではない。

男女・年齢階層別でみた生活満足度の変化が全体の変化にどの程度寄与したのかをみると、男女ともに40歳—64歳（報告書ではミドル層と呼ぶ年代）

で、全体の生活満足度が低い。さらに「困ったときに頼りになる人」（同居家族を除く）の存在が、将来の不安を軽減していることが示唆されている。

設問の違いがあり、一概に比較はできないが、後述する宮城学院卒業生の調査は、2021年という調査時期（コロナ禍拡大の最中）に聞いた「幸福感」であることをふまえておきたい。

3-2 宮城学院卒業生データから見る幸福感、学生時代の満足度

宮城学院卒業生の意識調査のデータ分析をもとに、まず幸福感をみていこう。

「あなたは今、幸せだと思っていますか、それとも不幸せだと思っていますか」との設問に、全数では「非常に幸せ」51.2%、「やや幸せ」45.7%を合わせると96.9%である。3つのコーホートで顕著な違いはみられず、いずれも半数近くが「非常に幸せ」と回答している。

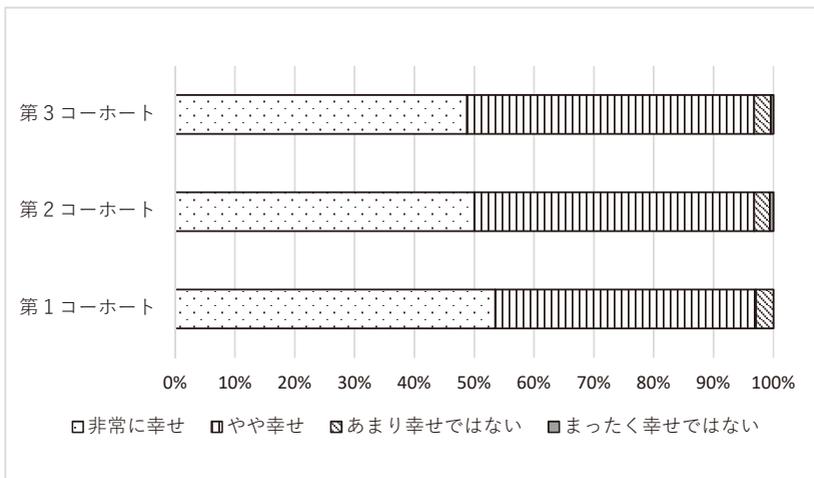


図1 コーホート別幸福感

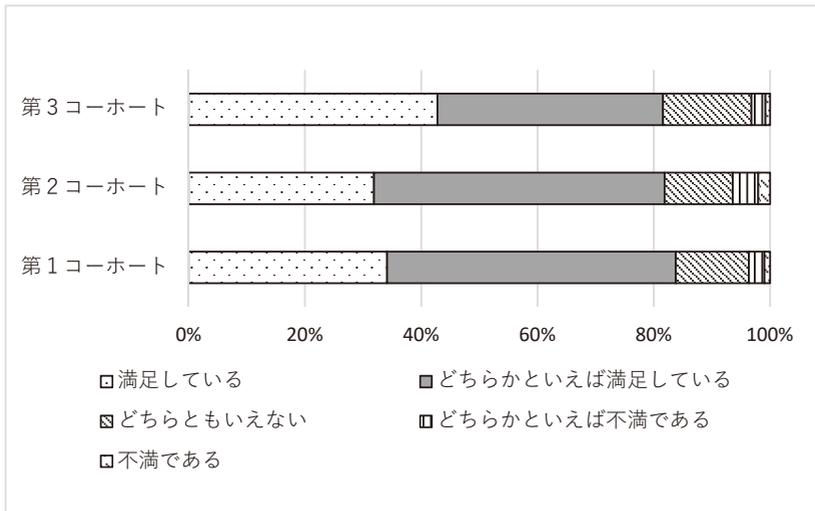


図2 コーホート別学生生活満足度

次に、「あなたは学生生活を振り返って、全体として満足していますか」の回答を見ると、「満足している」35.5%、「どちらかといえば満足」47.1%で8割以上が「満足」との回答であるが、3つのコーホートでは違いがみられた。第3コーホートで「満足している」が高めである(図2)。学生生活満足度と現在の幸福感との相関係数は $P < 0.001$ で有意ではあるものの、0.197とそれほど強い相関関係が見られるわけではなかった。

学生時代の振り返り—熱心に取り組んだこと

学生時代に「熱心に取り組んだ」ことについては、以下の図3のような結果となった。「熱心に取り組んだ」「どちらかと言えば熱心に取り組んだ」を合わせた割合が高いのは、「学問分野に関する知識を身に着けること」、次いで「友人関係を広げ、幅広い交友関係をもつこと」である。また、学生生活

地方ミッション系女子大学卒業生の社会関係資本と幸福感

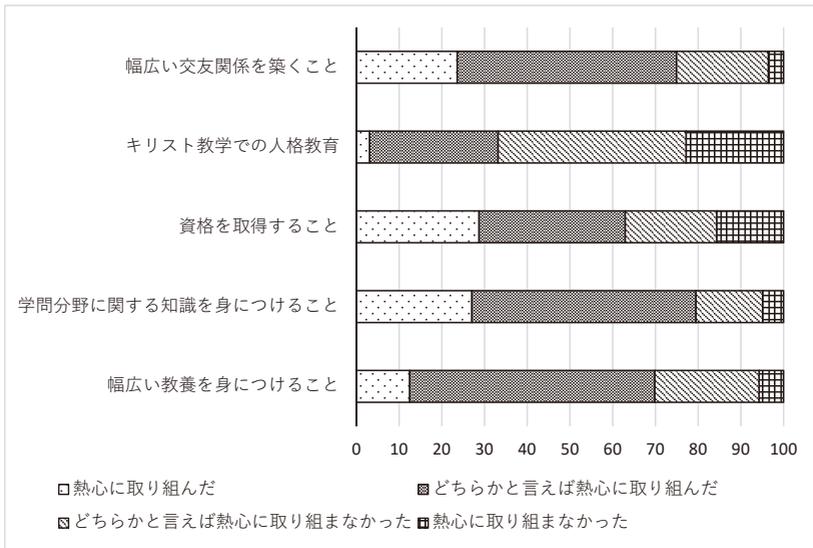


図 3 学生時代に熱心に取り組んだこと

表 3 学生時代満足度を従属変数とする重回帰分析の結果

	B	S.E.
(定数)	1.729***	0.139
コーホート	0.025	0.031
幅広い教養	0.159***	0.045
学問分野に関する知識	0.265***	0.045
資格を取得	0.046 ⁺	0.028
キリスト教学で人格教育	0.069*	0.035
幅広い交友関係	0.289***	0.033
Adjusted R2	0.304	
N	843	

*** p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, +p<0.1

満足度と学生時代の取り組みの関連を見た重回帰分析の結果が表3である。これらはいずれもコーホートを問わず、熱心に取り組んだほど学生生活満足度が高い結果にもつながっている。とくに「幅広い教養」「学問分野に関する知識」「幅広い交友関係」の関連性が高いことは注目に値する。

3-3 社会関係資本

社会関係資本に関する質問群として、「あなたは現在の生活の中で、次の人たちとどの程度付き合っていますか」との設問を設定した。その結果をまとめたのが図4である。

「近所の人」については、「まったくつきあわない」は4.4%、「ほとんどつきあわない」15.6%と、何らかの近隣のつきあいがある割合が8割ほど(79.9%)である。

「職場の人」と「よく付き合う」25.2%、「時々つきあう」28.8%で「機会

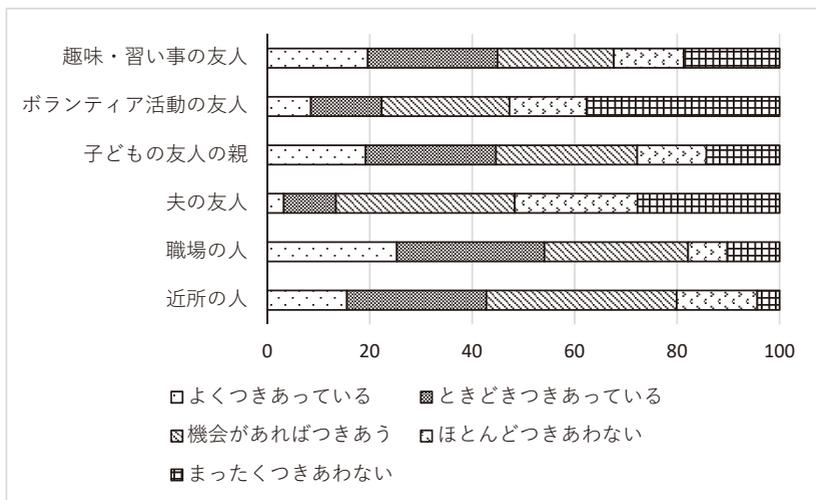


図4 友人・近隣との付き合い

があればつきあう」を合わせると全体では8割以上となる。「子どもの友人の親」では「よく付き合う」19.3%、「時々つきあう」25.4%、「機会があればつきあう」27.5%である。

「趣味・習い事の友人」との何らかの付き合いは7割ほどがもつ。全般に少ないのは「夫の友人」「ボランティア活動の友人」との付き合いであるが「機会があれば」を含めるとそれぞれ48.4%、46.8%である。

性別役割分業体制のもとでは、家族を近隣や親戚と結びつける役割は、女性に偏りがちである。社会関係資本論に対する批判の1つとして、地域や家族メンバーに活用されるための社会関係資本の供給源の役割が、そのようにもっぱら女性へと暗黙理に振り分けられるという、ジェンダーバイアスが指摘される(O'Neill and Gidengil 2006)。たとえばコールマンは、親同士が知り合いのネットワークの中に組み込むことで、相互監視のシステムとして機能し、学業からのドロップアウトを防ぐことができるとする(Coleman 1988=2006)。翻ってそれは、母親の就労を子どもの学業達成に対してマイナスの作用を及ぼすとの解釈を可能にし、非正規就労を選ばせた上で、ネットワークを築くための努力を母親たちに強いる結果を生んできた。

ただ、そのことを当の女性自身が役割として内面化しているとき、そうすることがむしろ幸福感と結びついている可能性もまた否めない。そこで次節では、卒業生の社会関係資本と幸福感のつながりについて考察を進めるわけだが、その前にまず宮城学院卒業生のジェンダー意識、育児観を概観しておきたい。

3-4 ジェンダー、自立、育児観—リベラルな個人志向

ジェンダー意識について、いわゆる定番の設問「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」との考え方についてどう思うかを尋ねた回答では、性別役割分業に否定的な割合(そう思わない+どちらかといえば思わないの計)

が全体で 85.6%と高かった。

「母親が仕事をもつと、子どもに良くない影響を与える」(図 5) との考え方についての回答では、母親の就労継続に肯定的な割合が高く(そう思わない+どちらかといえば思わないの計)、全体では 86.6%と高かった。

「女性が自立するためには、仕事を持つのが一番よい」(図 6) との考え方についてどう思うかを尋ねた設問の回答では、肯定的な割合(そう思う+どちらかといえば思うの計)が 8 割(79.6%)であった。

これらの回答から、卒業生の多くが、性別役割分業には否定的で、仕事の継続や女性の自立的就労に肯定的な、リベラルなジェンダー平等志向であることがわかる。

すでに述べたように、女性の賃労働がソーシャル・キャピタル(SC)を減少させたというパットナムの記述や、ひとり親家庭やきょうだい数が多

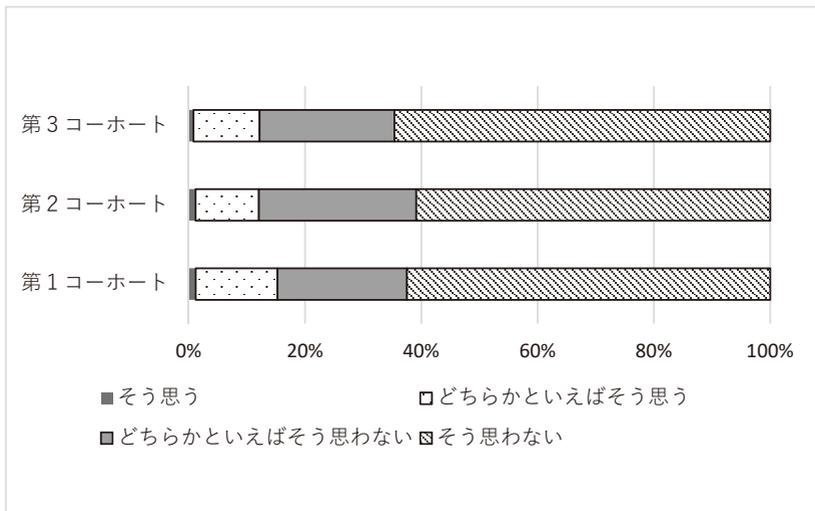


図 5 コーホート別ジェンダー観 1 (母親の就労継続否定)

地方ミッション系女子大学卒業生の社会関係資本と幸福感

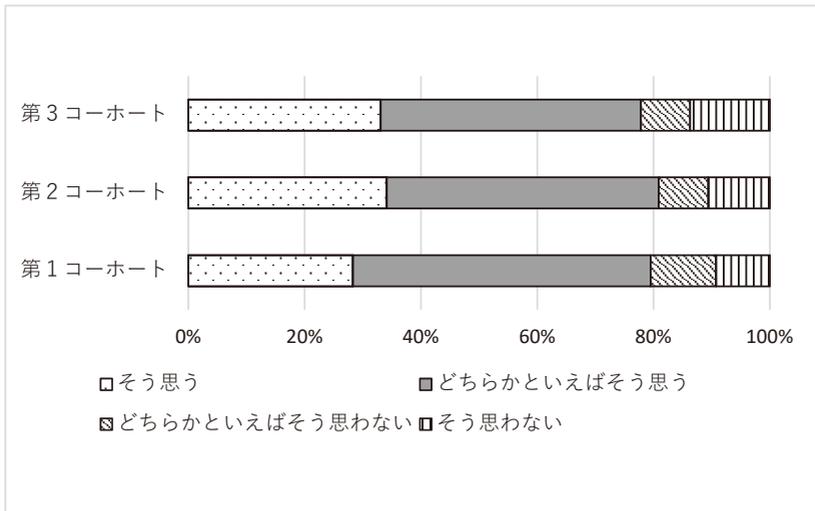


図6 コーホート別ジェンダー観2 (女性の自立と就労)

いことが子どもにとっての家族 SC を減少させ就学継続に不利に働くというコールマンの指摘は、女性の子育て責任を強調し性別役割分業を固定化させるものとしてジェンダー研究者から批判を受けてきた。しかしそうしたジェンダー規範と社会関係資本との関連性は、今回の調査結果にもあらわれていた。

以下の表4は、子どもの親との付き合いの頻度についての重回帰分析の結果を示したものである。統制変数としてコーホートの有無（あり=1、なし=0のダミー変数）と就労継続の有無（継続=1、中断あるいは就労経験なし=0）と、大学時代の取り組みとして交友関係を持つようにしていた（4段階）を変数にジェンダー観である「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」「母親が仕事をもつと子どもにとってよくない影響がある」（ともに4段階）を投入した。

表4 子どもの親との付き合い頻度についての重回帰分析の結果

	B	S.E.
(定数)	2.670 ^{***}	0.274
コーホート	0.115 [*]	0.053
夫あり	0.162	0.165
就労継続	0.157 ⁺	0.085
幅広い交友関係	-0.033	0.054
夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである	0.119 ⁺	0.064
母親が仕事をもつと子どもによく影響がある	0.138 [*]	0.063
Adjusted R2	0.023	
N	774	

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05, +p<0.1

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」「母親が働いていると子どもにとって良くない」のいずれについてもプラス方向の関連がみられる。子どもを常にモニタリングしようとする姿勢は、中産階級に特徴的であることが指摘されてきたわけだが（Lareau 2011 など）、それは新中間層家庭出身者の多い宮城学院卒業生にまさに当てはまる結果であるといえる。ただし就労している場合のほうが付き合いの頻度は高くなっていることから、「仕事も家庭も」という指向性もまた見て取れる。

3-5 育児観

しつけ意識から育児観をみよう。回答者の子どもの有無では9割が子どもも有りで、子どものいる対象者に「あなたはそのお子さんのしつけをどのようにしてきたか」を尋ねた設問では、個人志向の育児観が見えた。設問で「性別や生まれ順のけじめを重視」では、8割弱（77.8%）が否定的（そう思わない+どちらかといえばそう思わないの計）であった。40代の世代でその傾向がやや高い（第3コーホート 81.8%）

地方ミッション系女子大学卒業生の社会関係資本と幸福感

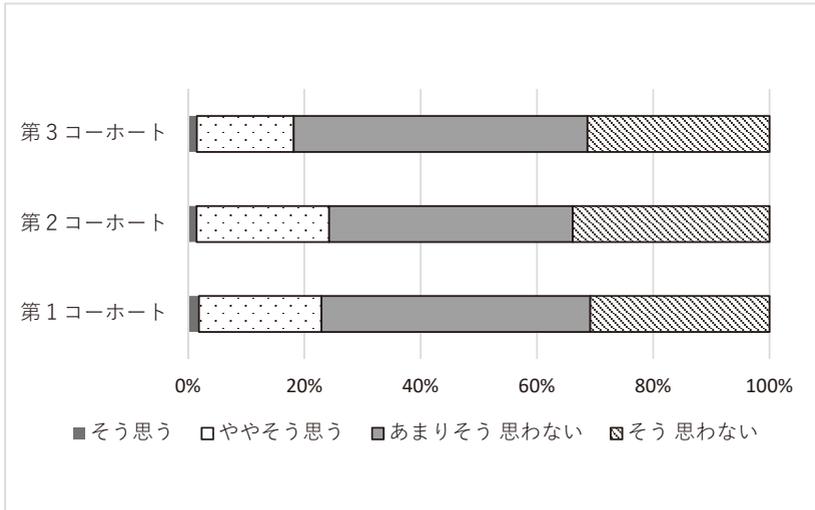


図7 コーホート別しつけ方1 (性別や生まれ順の重視)

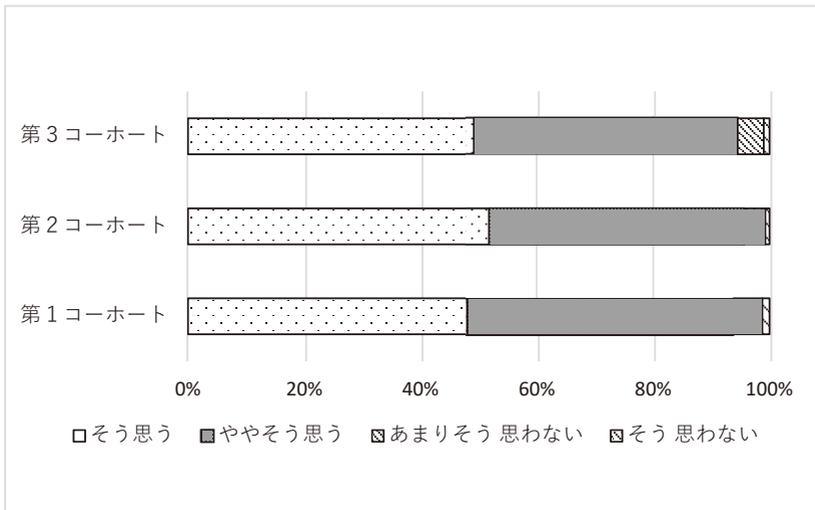


図8 コーホート別しつけ方2 (個性の重視)

一方、「子どもの個性重視」では、回答者の95.6%が肯定的であった（第1コーホート 93.8%，第2 95.6%，第3 94.6%）。回答者の育児観は、子ども中心主義，子どもの個性重視を旨とする，近代家族の育児戦略（天童編 2004）を体現していると思われる。

一方，前述のジェンダー平等意識，自立志向の高さを重ね合わせると，子どもの主体性を重んじる「個人志向家族」であるとともに，いわゆる片働き（夫が稼ぎ手）の育児専業の母親モデルに回収されない，自立・職業志向も見えている。

4. 社会関係資本と幸福感－宮城学院卒業生の資源， 家族，友人ネットワーク

すでに3-3で述べてきたように，宮城学院卒業生は現在，比較的豊かな社会的ネットワークを築いているケースが多い。社会関係資本が豊かであることは，幸福感の高さにつながるものが先行研究ではあらかじめされて来たわけだが，宮城学院卒業生の場合にはそれはどのくらい当てはまるのだろうか。また学生時代の学びやネットワークについてはどうだろうか。その点を明らかにするために，幸福感を従属変数とする重回帰分析を行った。

分析の結果を示したのが，表5である。モデル1にはコーホート，夫の有無，子どもの有無のみを投入している。ここでは年代が高いこと，また夫がいないことが幸福感に結びついていた。夫婦関係については，岡田玖美子が「フキハラ（不機嫌ハラメントの略）」などの今日の夫婦間葛藤の背後にある，夫婦の情緒性をめぐるジェンダー非対称的な構造に着目し，「フキハラ」の問題化は，女性のみ感情ワークを課してきた公私二元的社会システムへの異議申し立てであるのだと論じている（岡田 2022）。こうした状況が，夫の有無と幸福感との結びつきの背景にあると考えられる。と同時に，天童・片瀬（2022）では，宮城学院卒業生が卒業生たちのライフコースが

表 5 現在の幸福感を従属変数とする重回帰分析の結果

	モデル 1		モデル 2		モデル 3	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
定数	3.682***	0.105	3.727***	0.158	3.115***	0.194
コーホート	-0.045 ⁺	0.025	-0.047 ⁺	0.027	-0.048 ⁺	0.027
夫の有無	-0.153*	0.075	-0.192*	0.089	-0.173	0.088
子どもの有無	0.014	0.065	0.098	0.102	0.112	0.100
近所の人			-0.015	0.024	-0.015	0.024
職場の人			0.015	0.018	0.013	0.018
夫の友人			-0.033	0.023	-0.025	0.023
子どもの友人の親			-0.015	0.020	-0.018	0.020
ボランティア活動の友人			-0.021	0.020	-0.018	0.019
趣味の友人			0.003	0.017	-0.004	0.017
大学時代の友人数			-0.005	0.008	-0.004	0.008
大学時代の友人の有無			0.119 ⁺	0.063	0.124*	0.062
大学時代の取り組み (幅広い交友関係)					0.068*	0.030
大学生活満足度					0.094***	0.027
Adjusted R	0.005		0.010		0.047	
N	664		664		664	

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, ⁺ $p < 0.1$

新中間層家庭に特徴的な「高学歴女性の専業主婦化」というライフコースがかなり定式化されていたことを指摘していたけれども、今日ではそのライフコースを歩むことが必ずしも「女性の幸福」を意味しないことを奇しくも示す結果と言えるかもしれない。

続くモデル 2 では、そこに現在のネットワークを投入した。近隣、職場、家族、ボランティア活動、趣味を通じての友人には関連しているものは見られなかった一方で、宮城学院時代の友人についてはその人数ではなく、その有無において関連が見られた。この 2 つの違いは、パットナムらの指摘するボンディングとブリッジングの差と考えられ、幸福感においては付き合い

の広さよりも深さが重要である可能性を示している。

モデル3では、学生生活満足度および大学時代の取り組みとして幅広い交友関係を築こうとしたかについての質問への回答を投入したところ、いずれも現在の幸福感との関連を示している。このことは、充実した大学生活を送れたことが後の幸福感にも影響する傾向を示唆するものと言える。しかも表2の記述統計量からは、幅広い交友関係を築こうとしたことは、学問分野に関する知識に次いで、学生時代に熱心に取り組んだことがらであることがわかる。

5. 考察—現代女性のウェルビーイングと高等教育の役割

本稿では、地方のキリスト教主義女子大学である宮城学院卒業生（40歳代から60歳代）のコーホート分析をふまえて、社会関係資本と幸福感の関連を考察してきた。

卒業生1100件を超す質問紙調査の回答から見えてきたことは、第一に、学生時代の熱心な取り組み、とりわけ専門的学問分野の知識を深めた経験、友人関係が卒業後の人生における幸福感につながっている可能性である。これは、地方の、キリスト教主義の人格教育を土台とする女子大学の場ならではの文化資本、社会関係資本の構築とみることもできる。

第二に、ジェンダー平等、女性の自立への肯定感、個人志向の育児観からは、リベラルな個人志向が見て取れ、これは現代日本のジェンダー課題にさまざまな示唆を与える。

女性就労率の高まりを背景としたジェンダー平等の推進は、性別役割分業の見直しを要請し、それを否定することがいわばポリティカル・コレクティブネスとなっている。そのことは、宮城学院卒業生への調査データにもあらわれ、いわゆる伝統的ジェンダー観に否定的な回答が多かった。育児においても性別や生まれ順ではなく、その子の個性を重視するべきとの規範が広がってい

る。

ただそのことは、実際にそれまで女性に振り分けられてきた妻として、母としての役割から距離を取ることができていることを意味しない。近隣や子どもの友人の親との付き合いの頻度の高さは、相変わらず女性が家族をコミュニティに結び付ける役割を担っていることを示している。しかしそのことは、本人自身の幸福感との結び付きはみられなかった。そうした自らの背負われている役割と意識との間のコンフリクトが、夫への不満にも転嫁されがちなのかもしれない。

すでに触れたように、社会関係資本については個人財としてのとらえ方と、集合財としてのとらえ方とがある。幸福な人の存在がコミュニティにおける円滑な人間関係形成につながる面はあるにせよ、幸福感そのものはひとまず個人財的なものといえる。今回の分析からは、それを支えるものとして、現在のネットワークではなく学生生活の満足度、そしてそこで築いた関係性がかかわっているとの結果が示された。

学歴においてジェンダー差があることの説明としては、これまで女性の収益性が低いことが指摘されてきたわけだが（たとえば矢野 1986）、学生生活の充実が後年の幸福感に結び付いていること、そしてそれが夫や子どもの存在から独立した影響を持っていることは、女性が高等教育を受けることの持つ意味についての問い直しを迫るものといえるのではなからうか。

最後に、本稿で取り上げた社会関係資本と幸福感は、言葉を換えれば女性のウェルビーイング（well-being）な生き方の考察という意味を持つ。ウェルビーイングには、幸福、安寧、安心・安全な状態といった訳があてられることが多い。ウェルビーイングとは、精神的、身体的に良い状態にあることだけではなく、社会的ウェルビーイング、すなわち、ひとり一人が社会の一員として役割を持ち、経済的に自立し、健康的な生活を送る環境が整えられ

ているかを示している（天童 2022: 24）。

質問紙調査に並行して行ってきた卒業生インタビュー、また地方都市のキリスト教主義女子大学のフィールド調査（長崎、広島など）を通して、キリスト教主義に基づく文化的価値の伝達が、市場原理、教育の商業主義の波にさらされる時代にあることにも気づかされた。

そのなかで卒業生の調査データから見えてきたのは、宮城学院という文化資本、社会関係資本が、市場原理とは別の、もうひとつの価値創造の土台となり、ウェルビーイングの体現の様相を示したことである。そして、学生時代の豊かな学びと友人ネットワークの形成は、経済至上主義一辺倒の「高等教育」言説や、経済領域に特化した「女性活躍」言説へのオルタナティブを示し、女性のエンパワメントが本来の意味で「女性が連帯して力をつける」、変革的知の創造と教育実践の道を拓くものと思われるのである。

謝辞：本調査に当たっては宮城学院同窓会、ならびに同窓生の皆様より多大なご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

付記：本論稿は、JSPS 科研費 21K02245（研究代表 片瀬一男・東北学院大学）の助成による成果の一部である。

執筆分担について、主に全体の構成を天童睦子が、データ分析を石川由香里（立正大学文学部社会学科教授）が担当し、両者の議論を経て共同で執筆を行った。

〔注〕

1. 調査対象 3297 票のうち、宮城県内居住はおよそ 8 割。他の東北地方を入れると 9 割ほど。他の地域（関東、関西など）の居住者は割合としては少ないが、各地に支部があり活発な同窓会活動がある。
2. 世界幸福度レポート [World Happiness Report 2023 | The World Happiness Report](#)

3. 内閣府 2023年2月—3月実施 Web 調査。「満足度・生活の質に関する調査報告書 2023 ～我が国の Well-being の動向」report07.pdf (cao.go.jp)

〔参考文献〕

- Aldrich, D. P. 2012, *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*, Chicago, H: University of Chicago Press.
- Bartkus, V. O. & J.H. Davis, 2009, *Social Capital*, Cheltenham: Edward Elgar Publishing.
- Bourdieu, P. 1979, *La Distinction: critique sociale du judgement*, Paris: editions de Minuit. (=1997, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン—社会的判断力批判 I』藤原書店.)
- Bourdieu, P., 1986, "The forms of capital". In: John G. Richardson (ed.): *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*. New York: Greenwood Press, pp.241-258.
- Coleman, J.S. 1988, "Social Capital in the Creation of Human Capital", *American Journal of sociology*, 94, S95-S120. (=2006, 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 205-238頁.)
- Coleman, J.S. 1994, *Foundations of Social Theory*, Cambridge, MA: Belknap Press.
- Dewey, J. 1915 (=1998, 市村尚久訳『学校と社会—子どもとカリキュラム』(増補版), 講談社学術文庫.)
- Field, J. 2017, *Social Capital, Third edition*, London: Routledge.
- Granovetter, M. 1973, The Strength of Weak Ties, *American journal of Sociology*, Vol. 78, no. 6, pp. 1360-1380.
- Halpern, D. 2005, *Social Capital*, Cambridge: Polity Press.
- 石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子 2018, 『子育て世代のソーシャル・キャピタル』有信堂高文社.
- 稲葉陽二 2011, 『ソーシャル・キャピタル入門—孤立から絆へ』中公新書
- 片瀬一男 2019, 「集会的記憶の文化社会学—宮城学院創立記念誌『期にいたりて実を結び』の内容分析」宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報『民族

- と宗教』(52) : 89-110.
- 片瀬一男・相澤 出・遠藤恵子 2019, 「戦後日本社会における女性たちの「もうひとつの」個人主義：宮城学院同窓生の生活史の分析から」キリスト教文化研究所研究年報『民族と宗教』No.53, 37-59.
- 片瀬一男・天童睦子 2022, 「宮城学院卒業生の初期ライフコース—女性と高等教育への社会的アプローチ」キリスト教文化研究所研究年報『民族と宗教』No.55 : 7-39.
- Lin, N. 2001 (=2008, 筒井淳也ほか訳『ソーシャル・キャピタル—社会階層と行為の理論』ミネルヴァ書房.)
- Lareau, A. 2011, *Unequal Childhoods: class, race and family life, 2nd edition*, Berkeley: University of California Press.
- Norris, P. & R. Inglehart, 2006, Gendering Social Capital: Bowling in Women's Leagues ?, in O'Neill, B. and E. Gidengil (eds.), *Gender and Social Capital*, New York: Routledge, pp.73-98.
- 岡田玖美子 2022, 「夫婦の情緒性に潜むジェンダー非対称性をめぐる理論的視座の検討：近代家族論を手がかりとして」『家族社会学研究』34(1): 16-28.
- O'Neill, B. and E. Gidengil 2006, *Gender and Social Capital*, New York: Routledge.
- Putnam, R. 1993, *Making Democracy Work: Civic traditions in modern Italy*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Putnam, R. 2000, *Bowling alone: The collapse and revival of American community*, New York: Simon & Schuster (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.)
- Shimbo, A. & Tendo, M. 2022, "Creating Cultural Resources and Reading: A Case Study of Public Library and Parental Invisible Pedagogy in Tokyo", *International Journal of Educational Research*, 113(2022) 101970.
- 天童睦子編 2004, 『育児戦略の社会学—育児雑誌の変容と再生産』世界思想社.
- 天童睦子編 2008, 『知識伝達の構造—教育社会学の展開』世界思想社.
- 天童睦子 2022, 「地域子ども学の課題—災害, 持続可能性, 北欧の視点」, 地域子ども学研究会編・天童睦子・足立智昭責任編集『地域子ども学をつくる—災害, 持続可能性, 北欧の視点』東信堂, 10-32 頁.

地方ミッション系女子大学卒業生の社会関係資本と幸福感

矢野眞和 1986, 「女子高等教育の社会・経済的効果」天野正子編著『女子高等教育の座標』垣内出版, 159-182 頁.